博士論文

大学生の将来目標に対する支援の実践に関する心理学的研究

2016 年度

東京成徳大学大学院 心理学研究科
研究生　村上香奈

論文概要

我が国では、1995 年以降 2009 年を除き、大学新卒者の 3 年以内の離職率が 3 割を超えている。これは、新卒時の就職が形骸化している社会的な問題である。大学は、進路決定のプロセスにおいて青年期の発達課題を機能させ、主体的に悩み考えさせ、その結果として進路決定につながるよう教育することが重要である。本研究は、大学生の将来目標への支援のあり方を検討して、とりわけ授業のなかで、どのような取り組みを行えば将来目標への支援が効果的に行えるのかを明らかにすることを目的とした。主に、以下の 6 つの研究を実施した。また、本研究の方法は、一部、質問紙調査を使用したが、主な方法として教育法を使用した。

1)研究 1…大学生にとっての「悩むこと」のイメージを調べた。

大学生を対象に①「悩むとは」、②「自身の将来について悩むとは」、③「私は悩んだとき」という文章完成法の質問紙調査を行った。②の「自身の将来について悩むとは」に対して肯定的な記述をした大学生が③の「私は悩んだとき」に対してどのような記述をしているかを、KJ 法を援用した方法により分析した結果、大学生の中には自身の将来について悩み考えることを肯定的に捉えていても、実際の悩みに対して解決に向けた取り組みがなされていない状況のあることなどが示唆された。

2)研究 2…大学生のアイデンティティ確立に社会的資源と目標志向が与える影響を調べた。大学生を対象にアイデンティティ尺度、モラトリアム尺度、社会的資源質問紙、将来についての目標志向質問紙を実施した。社会的資源や目標志向とアイデンティティ確立との関係を調べるため、階層的重回帰分析を行った結果、社会的資源から影響を受ける場合、焦りではなく共感を得ること、ならびに目標志向を高めることがアイデンティティ確立につながることなどが示された。

3)研究 3…半構造化面接による将来目標への支援の検証をした。

大学生を対象に、計 4 回の半構造化面接（4 回目はフォローアップ）を実施し、スケーリングによる将来像作成と目標設定を繰り返し行った。また第 1 回目の終わりには自己観察課題、第 2 回目の終わりには社会的フィードバック課題を、次の回までに遂行した。フォローアップ時の逐語記録の結果、協力者全員が「方法への注目」に関する発言を行い、スケーリングや課題といった方法が実践しやすいものであり、大学生の考える契機や変化につながったことなどが示された。

4)研究 4…講義形式による将来目標への支援の検証をした。

大学生を対象に、3 コマ（3 コマ目はフォローアップ）の授業を講義形式において実施し、協力者がスケーリングによる将来像作成と目標設定を繰り返し行った後、ピアである同年代の大学生の将来像と目標を授業者が協力者にフィードバックした。フォローアップ時の自由記述の結果、講義形式であっても協力者にとって自分について考える機会となり、また「行動化」のような変化が見られ、スケーリングやピアの意見を聞くことの効果などが見られた。つまり、講義形式であっても半構造化面接と同様の効果が見られた。

5)研究 5…グループワーク形式による将来目標への支援を検証した。

大学生を対象に、3 コマ（3 コマ目はフォローアップ）の授業を実施し、協力者はスケーリングによる将来像作成と目標設定を繰り返し行った後、6 名程度のグループに分かれ、自分の将来像と目標を互いに発表した。フォローアップ時の自由記述の結果、研究 3 と研究 4 同様にスケーリングの効果が見られ、さらにグループワークによるピア同士の意見交換がスケーリングによってもたらされた効果を具体的な変化へとつなげる可能性のあることなどが示された。

6)研究 6…統合形式による将来目標への支援を検証した。

研究 6 は研究 3～5 の方法を統合し、6 コマ（6 コマ目はフォローアップ）の授業を実施し、スケーリングによる将来像作成と目標設定、授業者によるピアの将

来像と目標のフィードバック、グループワークによる将来像作成と目標設定、課題の実施と課題についてのグループワークを実施した。その結果、プログラムの効果として、アイデンティティ確立度が徐々に増し、目標志向が高まる傾向が見られた。また、「混乱」高群や「回避」高群などのアイデンティティ確立度を高めたことが示された。さらに、『将来像や目標の具体化』『行動化』『行動への意欲』『将来への志向』『成長の認識』『ポジティブ・前向きな変化』『危機感』といった多様な変化が見られることが示された。